

まずはキッチンから



功刀 滋

京都工芸繊維大学工芸科学研究科生体分子工学専攻、教授。
京大工博、京都大学工学研究科高分子化学専攻博士後期課程単位取得退学。
専門は生体高分子化学。
E-mail: kunugi@kit.ac.jp

私のいる大学はいわゆる理工系大学であるが、その女子学生比率は全学で24%あり同種大学のランキングではいつも上位となる。女性教員比率も9.5%と理工系(単科系)大学としては上位に属する。昨今喧伝される「高校生の理科離れ」にしても、こと女子学生に限って言えば、大学の理工農医薬に進む学生(各年1年生)の女性比率は、平成15年度の20.3%が23年度では23.2%と伸びている(学校基本調査より)。四十数年前に私が大学に入学したとき、工学部九百余名の中で女性は1人しか居られなかったことを思い出すと、まさに隔世の感である。

私がこの頁の執筆に推されたのは、このようなことを紹介するためではなく、私どもカップルが共働き歴三十数年で、そのうちの大半をいずれかが単身赴任という状況で暮らしていることをご存じで、その間のいろいろな経験談を書けという思いからであろう。

しかし、さまざまな経験談はあるものの、個別の話は人それぞれの事情や状況によって大きく異なり、また読む方の年代によって「あなた達は良いわよ」となったり「なぜそんな理不尽なことに甘んじたの」となったりするだろう。社会の「共同(協働)」精神は時代とともに少しずつ伸長し、環境もわずかずつではあるが改善されてきたので、現在の観点から見れば、私どもの経験はあまり使い物にならないかもしれず、むしろ胡散臭い自慢話や単なる愚痴に聞こえるだけだと懸念する。

そこで、このシリーズのタイトルについて考えてみたい。まあ英語にはできそうもない「私事」の用例もかなり出てくるようになり、そこでは種々の解釈があるだろうが、「わたくしごと」でもなく「しじ」でもない私事には少なくとも二つの意味があると思う。一つは、随分昔とある学生君に「先生達は良いですね、『やりたいこと』と仕事が一貫しているようなものだから」と言われたことがあるが、そのような「やりたいこと」の類である。それがハマサキ君のように、釣りであってもいい。

もう一つのほうが問題なのである。ひとが生きるうえにおいて不可避な事柄のことである。いわゆる「食う」・「寝る」を基本とし、子育ても近所づきあい、生活する所作すべてが含まれる。これを単純に「私事」と表現してしまうこと自体も問題であろう。ややもすると、仕事を行うために生活をするかのように見受けられるが、実はコチラの方が「人生」であり、「楽しむべきこと」にもなりえ、そのために仕事をしているのであろう。

この後者の私事は、万人にあてはまる。単身赴任をしていれば当然であるが、そうでなくてもである。一年ほどドイツの研究所に滞在していて、最も強烈な印象を受けたのは、彼らが個々の生活をいかに大事にしているかということであった。大変お世話になった日本人の女性研究者は、ドイツでの食事の用意を筆頭とする家事一般が、日本とは仕組みが異なり簡素である、ということを書かれた。彼女は関東の農村部の旧家の長女であったから、日本での生活におけるとくに女性の仕事の量と質を実体験しておられた。

しかし、現代の筆者らの周りを見渡してみると、彼女が渡欧した40年以上前と比べて、生活は相当簡略化している。その軽度になった私事を、協働で行うところが肝心であろう。こんなことを書くと、わが配偶者からは「不十分である」と言われそうだし、「そんなのんびりしたことを言っておられるのは、貴方が恵まれているからだけだ」とお叱りになる向きもあるかもしれない。しかし、まあ「生きていける程度のことは一通りする」ことがまず重要ではなからうか?

男女共同参画社会基本法などは「男女が、……社会のあらゆる分野における活動に参画する機会の確保」を言い「共に責任を担うべき社会の形成」を謳っているが、とくに後者の「社会」には「家族」という最小単位の社会が基礎となっていよう。その中で共同(協働)なくしては、「あらゆる分野における……」ことも難しいのではないかと思う。まずはキッチンから始めるとしてはいかがであろうか。